

半世紀ぶりの便り



先月（一九九六年二月）十三日、突然父の訃の知らせを受けた。父は信州諏訪に居た。弱っているとは聞いていたものの、まだまだ大丈夫と弟の報告があったばかりであり、悲しみよりも狼狽が先行する。一年半程前に鹿児島に移って以来、ずっと会っていないかった。取るものも取り合えず、夫と夕方の飛行機に飛び乗った。

葬儀は友引を避けて十六日に行われた。前日まで春のような晴天が嘘のように、重苦しい雲に覆われた寒い日となった。時折粉雪が舞う中を、告別式の弔問を受けるため、弟妹とテントの前に並んで立った。故郷を離れて四十年、時折は帰っていたとはいえ殆どの弔問客が見知らぬ人となっていた。妹が小聲で誰なのか知らせてくれる。

「成ちゃんのお嫁さんよ」

成ちゃんとは、今は跡形もないが、私の家の筋向かいにあった上手な仕立屋さんの一人息子で、数年前に亡くなったと聞いていた。ついに四十年間会わず終いだった。私はこの一家に会ったら是非聞きたいと思っていたことがあったのだが、移転先を知らず、そのままになっていた。私は挨拶の後、そのお嫁さんにそつと聞いた。

「神戸満里ちゃんの住所を教えてくださいのですね」
彼女は頷いて、あとから知らせてくれると約束して去った。

神戸満里子とは、私の小学校時代の親友である。彼女の父は軍医で、一家は満州にいたのだが、戦火が激しくなり、伯母を頼ってたった一人で疎開して来た。そこが成ちゃんの家だったのである。仕立屋とはいえ、昔はれっきとした諏訪藩士の家柄だった。同学年ということで、真先に私が紹介されて、すぐ仲良しになった。編入されたクラスも偶然私と同じになり、身長も殆ど同じだったから席も近くに決

められた。それから学校から帰ると、すぐに私の家に来て、夕飯まで遊んだものだった。当時は又、よく二人で温泉に行った。朝夕一日に二回入ることもあった。

諏訪は温泉の町である。各町何処かに湯が湧いていて、天秤棒で桶に汲んだ湯を運んで来ては、洗面やお台所で使うのである。朝一番のその仕事は、子供たちの日課とされていて、長女の私もよくやらされたものだった。まだ薄暗い朝、凍てついた道を力タカタと下駄の音をたてながら、こぼれないようにゆさゆさとバランスを取って歩く。今の人には「汐汲み人形」のスタイルといえば分かるだろうか。旧甲州街道沿いの連子格子のわが家の風情を懐かしく思い出す。

満里ちゃんは美少女だった。弾力のある黒髪はきちんとおかつぱに切りそろえられて、パツチリとした目、ふつくらした色白な頬、まるで日本人形のようだと思つたものだった。当時少女達の間でよく読まれていた、吉屋信子の「毬子」という小

説の主人公毬子の着ていた、襟とカフスにレースの付いた黒ビロードの服とおなじようなビロードの服を持っていた。それが又よく似合つて、信州の山猿と言われた私たちの中にあつては、一際垢抜けて目立った。

女の子の遊びは縄跳び、石けり、お手玉などであったが、満里ちゃんはお手玉が上手だった。板の廊下にてべたんと座つて、「おひとつ、おひとつ、おるしておさい」と歌いながら、お手玉を捌く。その歌も満州のそれは一寸異なつて、一貫上がるのも長かったが、満里ちゃんはそれも広めてしまった。二つのお手玉を交互に投げ上げるのは、千何回という私たち仲間の新記録保持者でもあった。

ノートもきちんとした字で取つていて、時折下調べをしてきた。当時の私たちは、授業はぶつつけ本番が実力であつて、下調べなどはアンフェアだと思つていたから、彼女はその点では、皆から白い眼で見られてしまった。このことは彼女にとつて納得いかないことだったようで、何年か後、手紙で質問し

てきた。無理もないことなのだが、当時はだれもがそれほど学校の勉強や成績を気にしていなかったの
で予習の習慣がなかった、と言えばよいのだろうか。

終戦の二カ月前のこと、私の家が市役所に隣接して
いたため、強制疎開で土蔵以外の殆どが壊される
羽目になってしまった。今思えば、市役所こそ移転
させるべきだったのに。そのため私と家族は、田舎
の親戚の家に厄介になることとなり、おかげで戦後
満里ちゃんが親元へ戻った時も会えず終いだっ

た。先日妹に電話した際、満里ちゃんの住所と電話番
号が分かったという。書き取るのもどかしく、す
ぐにその番号通りプッシュボタンを押した。

はきはきしたソプラノの声は正しく満里ちゃん
である。成ちゃんのお嫁さんから、私が住所を尋ねた
ことを知らせられていたらしく待ち構えていたよう
にポンポン話はずんだ

近況報告によれば彼女のご主人はマジンガー
ジェットの作曲者で、彼女は名古屋でビルを
経営しているという。

「ねえ、NHKの『大地の子』見た？あれの作曲を
したのは私の一人息子。渡辺俊幸って云うの。見て
なかったら来週から再放送やるから見て頂戴」

「えっ、そうなの。実はまだ見てないのよ」
ウンなかなか大したものだ。こちらら子供は五人
もいて、それぞれ個性的に生きてはいるが、華々し
いのは一人もいない。

二三日後、『大地の子』のサウンドトラックのC
Dが届いた。相変わらずのきちんとした綺麗な字の
お手紙も添えられていた。

何となく食わず嫌いで敬遠していた『大地の子』
だが、今度はしつかり見ることにしよう。実は私も
有名な作曲家の母親と友人ということで、ちよっぴ
り鼻が高い気分なのです

(平成8年3月)



